
~ 正拳伝 ~

山本 かぼちゃ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜正拳伝〜

【Nコード】

N9396K

【作者名】

山本 かぼちゃ丸

【あらすじ】

本格空手ストーリーここに見参！！

空手家はもちろん、興味のない方も必見！

くはじめに

中学の部活では、武道部の比率がとても低い事をご存知だろうか。

中でも「空手」というスポーツは世間体から見てもとても有名な武術である。

だが、実は高校でも武術全般から見ると、

「空手部」がある学校というのは大変少ないのである。

これには、理由が二つあると、私は考える。

まず第一に、空手という武術は、とても幅が広いのだ。

「空手」「からて」「KARATE」「カラテ」、これらは全て空手と読む。

しかし、これらは全て内容が異なる空手なのである。

例えるならば、

腕の立つ料理人数名が「一つの肉じゃが」をオリジナリティを出して作ってみると言われ、

その結果、全員異なる味の肉じゃがができたという感じである。

全て肉じゃがだが、全て異なっている。

どれが正しいという訳でもないが、一つにまとめるのは不可能だ。

そう言った具合に、空手も幅が広いので、

一つにまとめ、部活とするのには難しいのである。

そのなかでも、一つにまとめ、

うまく他校と連携をとれる学校では、空手部があつたりする。

第二に、「柔道」などと違い、相手に外傷を与える可能性が高いのが空手である。

下手をすれば、相手の一生を変えてしまう事もある危険な武術。

教育委員会やら、保護者やらから文句を言われても仕方ないスポーツなのだ。

同じ理由で、「合気道」「少林寺」といった拳法も、部活になつて
いる物は少ない。

逆に、相手を傷つけることの少ない「柔道」「弓道」は部活としても
認められやすいのである。

しかし空手が日本に普及していないというワケではない。

個人の道場などで空手を学ぶ人口もそこそこである。

しかし、反面オリンピックなどのスポーツの代表的な大会に出れないこともあり、空手人口が低迷しているのも事実である。

この小説は、空手をやっている中学校二年生の少年の話だ。

これを読んで、少しでも空手に興味を持ってくれる事を願う。

執筆日 2009・12・29

投稿日 2010・4・18

〈登場人物・用語解説〉

登場人物

山元 瞬 男
やまもと しゅん

奈良県に引越してきた中学校二年生。

元々東京に住んでおり、そのころから空手をずっとやっている。

関東大会では六連覇するという天才。周りからも神童と呼ばれてきた。

球技以外のスポーツはまるつきりダメ。

しかし、球技ならば人並み以上の実力を持っている。

その実力は、土壇場でより発揮し、天才的な技術と繊細さをかけもっている。

高前 優牙 男
たかまえ ゆづが

高校二年で空手五段の豪傑。瞬のいとこ。

瞬の空手を始めるキツカケとなった存在で、頼れるお兄さんタイプ。
全空連の最年少幹部で、今は自分の空手を始めた道場で師範代理を
している。

勉強もできるため、めっちゃめっちゃモテる。しかしながら彼女はいな
い。

金城 拓也 男
きんじょう たくや

龍門学園二年のサッカー部。

唯一サッカー部でサッカーが人並みに上手い。

強引な所もあるが、それも含めた優しさ、明るさがある。

自称モテ男。ウソをつくのがからっきし苦手。

高須 信一 男
たかす しんいち

主に寝る事が趣味であり、人とあまり関係を築きたがらない。

今では拓也や瞬と打ち解けている仲だが、他の相手には口を開けな

い。

スポーツ全般が得意。勉強も容姿も、人並み以上である。

そのため、不良に面白くない目でみられたりと、大変だった時もあったらしい。

泉川 遥 女

中二にして、龍門学園の生徒会長。

周りからの支持率がハンパないほど高く、その権限で部活を廃部にすることも可能。

彼氏はいない。

内山 和哉 男

龍門学園の番長であり、流真道場での一番の持ち主。

強いらしいが瞬にはまるで歯が立たない。

遥にベタホレ。

山元 信二 男

瞬の弟で、小学5年生。小学生とは思えないほどの渋い趣味の持ち主。

好きなスポーツはサッカー。クールで、落ち着きがある。

最近は囲碁と将棋にハマっており、父の武志との勝負で、現在15連勝を掲げている。

山元 武志 男

瞬の父親。明るい性格で、最近は瞬や信二にウザがられている。

とある研究所の研究員で、エラいらしい。

山元 幸子 女

瞬の母親。おだやかで心優しい。

山元 詩音 女

瞬の妹で、小学校3年生。弟達の面倒をよく見る気だてのいい女の子。

山元 空 男

瞬の弟。双子の兄。

山元 海 男

瞬の弟。双子の弟。

用語解説

全空連：全日本空手同連盟の略称。

く引つ越し〜

とある田舎に、一家族が引つ越してきた。

元々、東京に住んでいたその家族にとって、田舎に住むのはいやいやであった。

買い物は隣町に行かなければいけないし、道路は坂ばかりで狭い。

それでも、父親の仕事の転勤には逆らえなかった。

一日かけて引つ越してきたなにわの都、大阪。…の隣の「奈良県」。

山ばかりの地形は、都会育ちのこの家族には荷が重かった。

小さく、パワーのない軽自動車で、その傾斜をフルに昇って行く。

―着いた。

小さい小さい古風な家。

木造建築で、なかなかきれいで美しい家だ。

家のサイドには大きな楠の木が一本そびえている。

「……今時こんな家かよ。」

少年は軽自動車からしぶしぶと降りた。

その低い身長からは、小学生高学年かとまで思われてしまう。
しかし、彼はれっきとした中学生だった。しかも二年だ。

色白で、見た目だけなら、家でゲームばかりしているような少年だった。

メガネをかけている姿からも、『名探偵コロン』のようにも見えた。
彼の名は「山元瞬」。どこにでもいそうな名前を、彼は嫌っていた。

「あゝメンドクセ……。」

瞬はメガネをかけ直すと、頭をポリポリと掻いた。

「おいおい。せっかくの引越しなんだ。もっと楽しもうぜ？」

そう言ったのは、瞬の父、「山元武志」だった。

「……………アンタのせいでこんな目に会ってんですけど……………」

「なんか言ったか？」

「いや……………何も……………」

武志は、ため息をつくのと、肩に抱えていた大きな包み箱を一度地面におろし、こつと言った。

「今日は忙しいんだよ。もっとしっかりしてくれ。
ホラ！このキレイな桜なんて東京じゃ見れないぞ？」

武志は家の真正面にある川に連なっている桜を、まじまじと眺めた。

「……………」

瞬はうつむいていた。

「おにい〜！遊ぼうー！」

「おにい〜！」

双子の小さい子供が、瞬の足下で笑っている。

瞬の弟の「山元空」と「山元海」だ。

二人とも元気な男の子で、今、2才だ。

「お兄ちゃん！遊んであげてよー！」

車から、もう一人降りてきた。次は女の子だった。

「山元詩音」。瞬の妹で、9才の小学3年生だ。

「空も海もずーっと車の中だったからつままないんだよー！」

詩音も瞬に駆け寄った。

瞬は口をとんがらせていた。

「瞬。お金あげるから、4人で遊んできなさい！ママとパパは忙しいんだから。」

瞬の母親、「山元^{やまもと}幸子^{ゆきこ}」が、車から出てきて言った。

「ホラねー！！」

詩音がそう言つと、空も海も「ホラねー！」と言つた。

瞬は面白くなかつた。

「近くに遊園地があるらしいから行こー！！」

瞬は詩音に引つ張られて、連れられて行かれそうになつた。

「兄貴！いいよ！俺が代わりに行つてやる。」

そう言つたのは、瞬の弟「山元^{やまもと}信二^{しんじ}」だつた。

信二は運動大好きつ子で、面倒見も良い小学校5年生だつた。

「信二……いいのか？親父たちを手伝わなくて。」

「親父が良いつてよ。それより、兄貴、ホラッ！」

信二が何かを瞬に向かって投げた。道着と帯だつた。

「その坂をくだつて二つ目の十字路を右に曲がれば、空手道場があるつて親父が。」

信二が吐き捨てるように言った。

「信二……ありがとう。」

瞬は道着と帯を握ると、信二に言われた通り、道場に向かって走った。

瞬は東京で空手道場に通っていた。

そのたぐいまれなる才能から、「神童」「天才」などと言われている。

その他人が認める才能を発揮した瞬は、

小学校4年で始め、現在に至るまですでに段位である黒帯をとっていたのだ。

瞬にとって空手は全てだった。

瞬は走る事がからつきし苦手だった。

スポーツで出来るのは球技くらいで、

マット運動、持久走、50m走、跳び箱、その他諸々が出来なかった。

つまりは体育大会の目玉となる競技は全滅だったわけだ。

しかし、バスケ、サッカー、野球、テニスくらいは出来た。
瞬にとって、体育はそれで十分だった。

瞬は、信二に言われた通り、坂をくだって二つ目の十字路を右に曲がった。

そこには、見るからに和風で、大きな大きな家が堂々と建っていた。
家の傍らには看板が置いてあり、『流真道場』と大きく達筆で書かれていた。

「……………あつた…！これか……………『流真道場』か。」

見た所、普通の家だ。

これが本当に道場なのだろうか。

瞬はそう思いながらも、新天地をその目でしっかりと見つめた。

瞬はおそろおそろ家の扉を開け、「こんにちわ……………」と呟いた。

中に入ると玄関に対して垂直に廊下があった。

その廊下を隔てた奥には、ふすまがあり、紙の注意書きも貼っていた。

『道場に用のある者は、このふすまを開けるべし。』

「なんだ……これ。」

瞬がそういうと、廊下の右側から、女の人が出てきた。

「どうも、山元 瞬と申します。道場を見学したいんですが。」

女の方は瞬をジロジロ見ると、急に何かを思いついたようにこう言った。

「ああ！アンタが引越してきた瞬くんね？ウワサは聞いてるわ。ささ、こっちで道着に着替えなさい。着替え終わったら道場に入りなさい。」

そのパワフルな腕に押され、玄関を上がり、廊下を右の方に進んで行った。

突き当たりにはトビラがあった。『男子更衣室』と書かれていた。

「私はこの道場の師範の妻よ。みんなからは「にゃーさん」って呼ばれてるわ。」

女の方はニコニコ微笑んだ。

「……は……はあ。よろしくおねがいします……。」

(にゃーさん……？どちらかというと、がーさんじゃねーか？
猫というより……、虎だろ……？)

「さっ、着替えちゃいな。」

にやーさんに押され、更衣室に入らされた。

更衣室にはロッカーと洗面台が並んでいた。

瞬は蛍光灯をつけようと、スイッチをカチツと押したが、

蛍光管が切れているのか、電気はつかなかった。

反対を見ると、ビニール袋が大量に掛けてあった。

「『自由に使用してよい。』か……。ありがてえ。」

瞬はビニール袋を一枚、ピラッとめくりとった。

道着に着替えると、私服をそのビニール袋に入れて、さらにロッカーにいれた。

「さてと……。いくか。」

メガネを取り、ロッカーの上にそっと置いた。

瞬の目は輝いていた。

く引っ越し〜（後書き）

瞬…にやーさんなのか……？

に…なんか言った？

瞬…言ってますん。

〜新天地〜

…ガラッ！！

瞬は勢い良く道場の戸を開ける。

「押忍！！お願いします！！！」

瞬はそう叫ぶと、深々と一礼した。

その声に、道場の門下生らは一斉に瞬に視線を向けた。

「だれだこいつ…、新入りか？」という視線というよりは、睨みつけられている視線に近かった。少なくとも瞬はそう感じた。

それにしても、体格的にゴツイヤツが多い。

前の道場と全然ちげーじゃん。

でもまあ、その分練習厳しそうだし、もっと強くなれそうだな。

勝手気ままに想像していると、でっかいヤツらの中でも、さらにデカイヤツが、瞬の前に立って睨みつけた。

「……………てめえ、新入りかあ??」

「…はい。ここの師範はどこにおられますか？一度挨拶したいのですが……。」

「その必要はねーよ、ここは小学生の参加は認められてねーからなア！」

……このデカブツ……。

俺を小学生だと？もっかい言ってみろコラア！俺がその気になりやてめーらなんぞイチコロなんだぞ！！

そう言っつてやるうかと瞬は思ったが、引越しの幸先、あまり目立ちたくもないので、

「俺は中二ですが、それでも参加できないのですか??」

と、控えめに対処する事にした。いまじゃこれが精一杯である。

「……………お前が…中ニイ?……………ブツハツハツハ……………!!」

デカブツが笑い出すと周りの門下生も笑い出す。

この野郎。何がおかしい。ホントマジコイツぶん殴っつてやるうかな。

「何がおかしいんですか。」

「いや〜ウソは言っちゃダメだよ〜ボク〜!

どうしても入りて〜んなら、俺を倒してごらん〜?..?」

カチン、言ったなコイツ。

でもラッキー。

このいらつく野郎をメタメタにできる + 道場に入れる

良い事だらけだな。うん。

「分かりました。どこからでもかかってきてください。」

「……………ワツハツハツハ!マジでやる気がよ!..!」

「来ないなら……………行きますよ!..!」

瞬は右手を素早くデカブツの顎にヒットさせる。

「……………痛ってえ!..!もうキレた……………。コイツボロボロにしてやる!」

デカブツはサイドからボクシングのフックのような突きを、瞬の首もとめがけて突き出す。

しかし、瞬はスツとしゃがみ、その突きを簡単にかわす!。

「……これがアンタらのやってる空手ツスカ？これじゃボクシング……っしょ！！！」

しゃがんだスキにデカブツを足払いイイイイ！！！！

ドッテーーーーン！！！！

ふう。どうだ！思い知ったか。

「これで……文句ないツスね？」

デカブツも含めて門下生は全員口をパカッと開けている。

そのとき、道場の奥の部屋から、誰かが出てきた。

「こらあ！お前ら！何遊んでる！！もう刻み突き100本終わっ……た……のか？」

なんか見覚えのある人が……。

「あ、瞬！やつときたか！！！」

「え？え？もしかして……優牙さん！？！」

く新天地く
(後書き)

デ：くそー、「ヤキモチ」ついちゃった!!

瞬：それをいつなら「尻餅」っしょ…？

く高前優牙く

「……何してんだ？内山。」

ふうん。このデカブツ、内山って言うのか。略してデカヤマ…なんちって。

と、そんなことより、

「優牙さん、何でこんなトコにいるんですか？？」

「ふっふっふ、驚いたか？」

驚くも何も、まだ信じられない始末だ。

この人は「高前^{たかまえ}優牙^{ゆうが}」。俺のいとこにあたる。

高校二年生で、空手五段という豪傑だが、ゴリマッチョという体型ではない。

あえてマッチョをつけるなら今話題の細マッチョがぴったりである。

優牙は高校一年のとき、すでにインターハイで優勝。今年も優勝という、二連覇である。

そもそも瞬が空手を始めるキツカケとなったのが、この優牙だったのだ。

あれ？でも優牙さんには俺んちの引越しなんか一切ゆってねーよ
な……

ましてや東京で空手の強豪を育てる講習の師範になっていた優牙さ
んが、なんでこんなトコにいんだよ……。

「優牙さん、東京の講習はどうなったんです？」

「あ、アレ？あんなの真つ赤なウソだよ！」

ウソ……て……この人は……。

「俺、この道場で空手を始めたんだよ。」

初めてすぐ、引越す事になったんだけど。

でも空手の面白さはココで教わったようなもんだからね。

この師範が旅行に行ってる間、師範「代理」を任せられる事にな
ったんだ。」

「……………」

「つーか、瞬。お前内山と組手したのか？」

「はい。超弱かったツスけど。」

横目でデカヤマを見ながら、「超」にアクセントをつけてやった。
フン。ざまーみる。

「へー、強くなったねー、お前も。」

内山はココの道場じゃ一番の腕の持ち主なんだが。」

……ということは、ココの門下生は全員俺より弱えーってことか、なんぞえ。

「師範代理！俺は負けてねーッス！！」

内山が優牙に食いかかる。

「まあまあ、気を落とすな内山。瞬は東京じゃ「神童」とか「天才」とか言われてんだ。

元にコイツは関東大会で五連覇してんだぜ？」

「六連覇です。」

道場に衝撃が走る。

「ろ……く？」

「それだけじゃねー。コイツは組手だけじゃなくて、型も一級品だ。」

型……、それは空手の基本のことだ。その種類は50以上もある。

「そんなにほめないでください。返ってプレッシャーですし、そこまで上手くもないですし……。」

謙遜しとけ、瞬。しょっぱなからウザいキャラなんかになりたくねーし。

「くっ……、やい！チビ！こんどはぜってえ負けねーからなあ！！」
デカヤマがなんか遠吠えしてるよ……。ま、いいや。

「じゃ、そろそろ練習終わるか！！」

優牙がパンパンと手を叩く。全員しぶしぶと道場を出る。

その時のみんなの視線がやたら痛かった。

……………特にデカヤマが……………。

く高前優牙く（後書き）

内…デカいっつーけど、そんなでけーか？俺。

瞬…態度がな……。

優…言えてるぜ。

く仰天・驚愕く

空手が終わり、家に帰ると、もう引越は済んでいたようだ。

外はまだ明るいので気付かなかったが、もう7時を過ぎていたらしい。

「親父、サンキューな。」

俺は、俺に気を使ってくれた親父に礼を言った。

「おお、帰ってきたか、瞬。見たか？アレ。」

……アレ？

「何？それ。」

「見てないのか……。ま、見れば分かる！」

…何のことだろう。

俺は居間を出て、正面にある階段をゆっくり昇った。

前の家はマンションだったので、階段は新鮮味があった。

階段を上がりきって、俺は驚愕した。

なんと部屋へ繋がるトビラが5つあったのだ。

「これって、少なくとも5LDKってことだよな……。」

「うちってこんな金持ちだったっけ……。」

「うわー、なんか急にリッチになった気分だ。Feel rich!

Feel rich!

手前の右の部屋を開けると、空と海がいた。

「おにー！いいでしょー！」

「いいでしょー！」

「おお！良かったな！空、海！部屋貰ったのか！」

大分スッキリしてる。

「というか、部屋がデカ過ぎる。正平方で、6m×6mもある。」

「これが5つもあんのか……。」

「全面に青いじゅうたんが敷いてあって、奥にはベッドが背中合わせで置いてある。」

「手前はおもちやが散乱していて、早くも自分たちの部屋で遊んでいた事が丸分かりである。」

「じゃ、ルールやるときは気をつけるよ？」

「はい！」

「はい！」

俺はそう言つと、空&海・S R O O Mをあとにした。

その隣の部屋は、詩音の部屋だった。

女の子らしい。壁紙はピンクで、花柄だ。

それにしても、片付いている。

左手前の部屋は、信二の部屋だった。

うわゝ、我が弟ながら、大人っぽい趣味。

畳に囲碁板。座布団、奥にはふすまもある。T H E 和だ。

「何ジロジロ見てんだよ。」

「いやゝ別に。」

「じゃゝ早く出てけよ。あ、つーか兄貴アレみた？」

「アレ？なんなんだよ、アレって。」

「見てねーのか……、じゃゝ、いいや。」

つたく、もうすこし性格が良ければ完璧な人間なのに。

あ、でもコイツも親父と同じで俺に気イ使ってくれたな。

感謝、感謝。……それにしても、弟に気を使われる俺って…。

その隣はお袋と親父の部屋だった。

「ここが俺の部屋か。」

入ってみると、一番小さい部屋であった。

ベッドと勉強机、本棚を、スキマなしに置いてある。一辺が5mもない。

「……。まさかこれがアレ……ってこたあねえよな……。……ん？」

俺は本棚と勉強机の間のトビラに注目した。

開けてみると、下り階段がいきなりあり、ここでも驚愕した。

まるつきり外だが、縁側のようになっていて、普通に素足で行けた。

「何があんだろ？」

縁側廊下を進んで行くと、別館にたどりついた。

俺は関東大会を六連覇している。

関東大会の出場者は毎年500人以上。

その頂点に立つものは十分な賞金がでるハズだ。

しかし、俺はそんなものを見た覚えも、聞いた覚えもない。

そうか、ここにつかつたのか。

「…俺の六連覇でどれくらいになってたんだ？」

俺はその額に興味があった。親父は満面の笑顔でこう言った。

「一回の優勝で100万だからな、600万だ。」

600万……。

たしかにすごい額だが、これではとても個人宅に道場を作るなどできない。

と、思っていたら、親父が続けて言った。

「全空連（全日本空手連盟）に直接相談しに行ったら、すごいまけてくれるぞ。」

『期待の超新星に期待しましょう！』だつてさ！ハハハッ！」

おお、全空連様。ありがとうございます。

そしてその期待に応えるべく、ここでもっと頑張ります！

「ここで練習は自由にして良いぞ。」

だが、練習も良いが、明日から学校だからな。」

……………学校！？

く仰天・驚愕（後書き）

瞬 ……全空連様……、直接お礼を言いたいくらいだ。

ドロンー！

全空連……じゃ、お礼を貰おう。

瞬 ……いろんな意味でまた驚愕！？

（龍門学園）

「…じゃ、行ってきます…。」

気乗りしないまま俺は家を出た。

「初日なんだから、しっかり頑張ってきてな!!」

お袋が俺の肩をバシッと叩く。

四月六日。世間から見れば、『新学期』である、

今年から、中二になる俺。でも正直、中二で引越して…ヤだなあ。

学校の場所は俺の家から直線距離で300mちょい、とめちやくちや近い。

普通に歩いても5分かからずでいける距離だ。

しかし、道が入り込んでたりとかで、実際学校につくのは10分か
かるらしい。

そんなワケで、始業式の始まる8時半に間に合うよう、俺は7時4
5分に家を出た。

お袋からは、初日なのでもっと早くから行けと言われたが、そんな

トコに行くくらいなら、

昨日全空連様が提供してくれた我が家の道場で練習してる方が、ずっとマシだ。

俺は学校がキラ이었다。

友達はいたが、何しろ前の学校では「空手の天才」とか言われて、不良にケンカを売られたり、周りから変な目で見られたりしたからだ。

(…:今度は、俺が空手やってるってこと…:バレないようにしなきゃ…)

空手をやってる事がバレなければ、きっと普通に学校生活が送れるハズだ。

俺はチビで眼鏡で目立たなくて、

クラスメイトの一部から「あれ？お前いたの？」って言われるくらいで十分。

そつこう考えてるうちに、学校に着いた。

『龍門学園』……。すげえ名前。

学園証には竜のマークがはいつてるし、見た目完璧不良校じゃん。

俺はさっそく不安になった。

だが、まあ、中に入ってみるとそうでもない普通の中学校だった。

とりあえず職員室に入り、目立たないように事務の先生に転校の手続きをしてもらった。

担任と思われる先生は男の先生だった。

とてもゴツく、その割りにスーツで、ちょっとばかしヒいた。

「俺が担任の『剛堂 力』だ！よろしくな！山元！！」

うわー、名前濃ゆっつっ！

「お前は2 - Aだ！さ、ついてきたまえ。」

……うわー、今更だけど緊張してきた。

これから、漫画とかの定番の転校生扱いになるのか…。

あれほど目立ちたくないと思ってたのに、早速目立つのか……。

『2 - A』と書かれた札が見えて、緊張はピークに達した。

「俺が合図したら、入ってくれよ？」

剛堂先生は顔に似合わないウインクをして、教室のトビラに手をかけた。

ガラッ！

「さ！席に着け！！」

中の様子は、外から丸分かりだった。が、幸い中から外の様子は分からなかったようだ。

生徒がみんな口々に呟いている。

どうやら、剛堂先生が担任であることに不満があるようだ。

「さてと…、今日、転校生がきた！」

おっ……いよいよ来るか……？来てしまうのか……！！？

「入れ！山元！」

俺は深呼吸をしてトビラをあけ、

なるべく目立たないよう小さくなりながらそそくさと教壇に上がった。

うつむきながら、剛堂先生がチョークで黒板になにか書いている音をひたすら聞いていた。

「山元 瞬！東京から来たんだ。みんな仲良くな！！」

みんながザワつきはじめる。うわ〜、バリ恥ずかしい〜！！

「じゃ、なんか一言！」

おiiiiiiii！！先生！無茶ぶりすな〜！！！！

こんな状況で喋れるかああああ！！！！

……お前ら生徒も急に黙るなあああ！！！！

めっちゃめっちゃ恥ずかしいだろおおお！！！！

「……………」

結局黙りこくってしまった。

「……ま、転校初日で緊張してるんだろう。じゃ、山元は、一番角の席で。」

先生……。フォローするなら、最初からやらせないでくれ……………。

俺はさらにうつむいて、鞆を持ちながら机へ向かった。

途中で俺の顔を覗き込むような輩が何人かいたが、目をそらしてや

り過ぎした。

机に座ると、全員の視線がこちらにかかってきて、ウツとなった。

そんな中、俺の前の席のヤツは鼻提灯^{はなぢようぢん}をつくって爆睡^{はくすい}していた…。

く龍門学園く（後書き）

瞬：一番角の席でホント良かったあ…。
……………日差し強いけど…。

〜最悪〜

あゝあ、だからイヤなんだよ。転校。

休み時間になると、こう、なんでみんな俺にたかってくるの？

俺は何？珍しい動物ですか？

一方休み時間が始まって、前のヤツは寝ていた。

俺はうつとうしくなってきたので、テキトーに返事をして静かな場所へ向かう事にした。

教室はうるさすぎる。屋上とか……いいかも。

屋上は誰もおらず、田舎の風景とマッチしていて、とっても気が楽だった。

俺は屋上のベンチにドサツと座り込むと、眼鏡をとって目をつぶった。

明日になりゃ、普通に教室にいても、みんな気にかけないようになってくれるだろう。

転校初日はみんなそんなモンだ。今日だけガマンすれば事は足りる。

あとは自分と本当に気が合う友達を見つけて、その人とだけ接していれば十分である。

ふいに水滴が頬に落ちた。

目を開けると、どうやら雨が降ってきたようであった。

眼鏡を取って屋上を降りた所で、チャイムが鳴った。

「……………やべ。」

教室に着くと、ただ一人を除いては全員いなかった。

あ、次「体育」だった……………。

ま、いいや。どーせ面白い事なんてしないだろうし。

……………にしても……………この人……………ずっと寝てるよな……………。

俺は人差し指でさつきから熟睡中の少年をつついた。

すると、その少年は大あくびをして起きた。

「……………誰？あんだ……………」

第一声が、コレであった。

「……………、転校生？」

「…うん。山元っていうんだ。よろしく。」

「へー……………、俺は……………高須たかす 信一しんいち。」

「……………体育いなくていいの？」

「……………、メンドくさい。」

「……………。」

口数すつくねーなあ、コイツ。

でもイケメンだな。なんか悔しいけど。

「高須くん、趣味は？」

「……………睡眠。」

「…じゃあ好きなものは？」

「……………枕。」

「……………嫌いなものとかは？」

「……………日光。」

なんつー野郎だ……………。

なんか、つかれるなーコイツと話してると。

あー、ムリだ。気が合わねえ。

コイツとは友達になれそうにねーや。

そのとき、教室のドアがドーン！と大きな音を立てて外れた。

そこには5人ほどの男が立っていた。

「……………不良？」

「……………また来た。」

教室にズンズン入ってくる輩。完璧不良だ。イナカモンだけど。

「高須ウ……………？まあた授業サボりですかあ？？」

フードをかぶった大男がズイツと前に出た。どうやらこいつがリーダーらしい。

「……………メンドくさいだけだ。」

瞬が指をポキポキならす。

「オイお前ら、高須はもういい……。今度はこのなまいきなクソチビ眼鏡をやれ！」

フードが言った。

…ものの10秒で終わった。

楽勝楽勝。こんなヤツら、空手使うまでもねえ。

……………ハッ！やっちゃまった。イメージがあああ！！！！

「……………お前、許さねえぞ？この龍門学園の番長が、ハンマーセッションしてやらあ！！！！」

フードが殴り掛かってきた。

「……………へえ、なかなかやるなあ。でもお前、俺より弱えな。」

水月みづきに一発！！

「ぐ……………へエ……………」

……………さてと、ツラ拝ましてもらうか。番長の。

……………！！

なっ……………デカヤマ……………?!

〜最悪〜（後書き）

瞬…………ちっ、ちなみに特技は???

高…………早寝。

く友達く

……おいおい。まさかデカヤマがこの番長(?)だったとは……

これ、ヤバいんじゃない?

「……………」。

おいおいおいおいおい(汗)デカヤマの仲間めちゃめちゃ怒ってる
って、絶対。

「……………!」

「お願いしますっつっ!……!」

……………は?

何言ってるんだこの人達。

「……………何?」

「この学校の掟では、強いもの言う事に従うのがルールです!」

一人の仲間が言った。

「今の番長である内山さんを倒したあなたこそ…真の番長だ!」

真の…番長…？

うわーいい響き^^

おっと、そういうワケにはいかない。俺はチビで眼鏡で地味な少年なのだから。

「俺の言う事何でも聞いてくれるんだよね？」

「はい！-！」

「じゃあさ、俺が今した事、秘密にしといてくれない？」

「……………は？」

「番長とか向いてないし、そもそも俺、争いごととかキラいなんだ。」

「……………と。」

「今まで通り、コイツを番長としといて。俺が今コイツを倒した事も他言無用で。」

デカヤマを指差して言う。

「……………へ…へえ…。」

「じゃ、壊したトビラ、元に戻して、ここから出てってくれない？俺、高須くんと話があるからさ。」

「……………はい。」

デカヤマを引きずって教室を出て行く。

番長……………お前は どうして そんなに弱いんだ……………。

「……………お前……………強いな……………」

高須が頭をかきながら言った。

「……………そう？ マグレだよ マグレ。」

いかん いかん。

ただでさえ口数少ない高須くんが今のを人に喋るとは思えんが、念には念を入れておかねば。

「高須くんもさ、今の、黙っててくれない？」

「……………興味ないからな。」

ホッ……………あれ？ これって答えになってんのか？ ま、いいか。

「信……………でいいよ……………」

「……………え？」

……………あれ？ 高須くんが自分から話しかけてきたよ？ これは幻聴か？

「高須くん……つての…キライなんだ…」

「へ…へえ。分かったよ…信一。」

高須く…じゃなかった。信一と喋ってるところこっちまで口数少なくなるわ…ったく。

そうこうしてるうちに、チャイムが鳴り、みんなが帰ってきた。

「ふい〜！体育面白かったア！」

一番に教室に入ってきたのは、成宮くんにめっちゃ似てるめっちゃかっけーヤツだった。

「……ん？お前ら、サボりかよ。体育サッカーだったのに。」

「…あ、いや。転校初日で…ちよつと腹痛が…」

俺は笑ってごまかす。

「なっ！信一！……。」

信一に相づちを求めたが、……こいつはまた寝てるよ……。熟睡3秒だな…。

「……へ〜。高須と仲良くなったのか。」

さっきのかっけーくん(?)が俺らの方に近づいてきた。

「こいつが人と触れ合うとこなんて初めて見たぜ？」

「へへへ……。」

「あ、俺さ。金城きんじょう 拓也たくやっていうんだ。よろしくな！」

「うん。よろしく。拓也くん。」

「……くんづけとかやめよーぜ！呼び捨てで良いよ！俺もそうするし。」

「あ、俺は山元 瞬。拓也……はすっげーかっこいいよな。」

「……そうか？ま、男にほめられてもそんな嬉しくねーけど。」

そりゃそうだ。

「俺、サッカー部なんだ。お前サッカーやらねーか？」

「……いや……俺ホントスポーツ苦手で……。」

「いっていいって！俺も最初はドリブルすらまともに出来なかったんだから！」

「いや……でも……。」

俺、帰ったら真っ先に流真道場行って空手の練習したいんだけどなあ。

「じゃ！放課後はうちの部、来いよー！」

……勝手なヤツ……。

……でも……ある意味これって、友達が出来たってことかな。

ま、いいや。せっかくだし、見学くらいなら……言ってみようかな。

く友達く（後書き）

瞬：別にサッカーができないってワケでも…ねーんだがな！。

拓：じゃ、来いよ。

瞬：……………。（信一の真似）

拓：瞬、殴って良いか。

〈見学〉

放課後。

まだもらったばかりの傷一つない教科書をカバンにつめていると、拓也がやってきた。

「なっ！こいよ！待ってるから！！！」

……はいはい。多分入りはしないけど、見学くらいなら行ってやりますよ。

テキストに相づちをしていると、拓也は自分の机に戻り、今度は信一がやってきた。

「……………一緒に帰らない？」

「あ、ゴメン。俺、拓也にサッカー部の見学に来てって言われちゃってさあ。」

「……………じゃ、俺も行くよ。」

この一言で教室中がザワついた。

すぐに拓也が飛んできた。

「高須！！お前やっとサッカー部入ってくれるのか！！いや〜良かった！！」

「…え？信一、そんなに勧誘されてたの？」

「……………」

そうみたいだな。

「高須さあ、すごい球技上手いんだぜ？なのに寝てばっかだからもったいねーんだよ。」

へー。そーなんだ。

…ってことは、信一は寝てなきゃ十分にモテる条件をクリアしてるんだな……………」

「…まだ入るとは言ってないけど……………」

「じゃー！こいよー！」

再び去る拓也。…お前は気ままだな…。

カバンを背負って、信一とサッカー部の練習場に向かう。

「なあ、信一。ここの学校って、運動部なにがあんの？」

「……………水泳、陸上、野球、サッカー、バスケ、テニス、あとは…柔道かな。」

ちえっ、空手はねーのかー。ま、そもそも空手部がある学校が少ないからな。

「サッカー部、強いのか？」

「……………野球とバスケは何度も市総体で優勝してるレベルだけど、サッカーは……………」

「サッカーは？」

「……………人数が少なすぎてそれどころじゃない。」

……………おいおいおいおい（汗）

なるほど、なるほどね。

「……………着いた。」

これまたビックリ。

普通のコートの中分くらいしか練習面積がねーじゃん。

するとサッカー部と思われるメンバーが全員こっちを向いて……………

「よろしくお願ひしますっ！！！」

えええええええ！？拓也のヤローまたテキトーなこと部員に言ったんじゃないねーだろーなあ。

「よっす！瞬、高須。」

「……………な、ななななんだよコレ。」

「さ、コレに着替えて。」

拓也はそう言つと、俺らに何かを渡した。

「……………これ、ユニフォームだ。」

「おいおい、拓也。まだ俺ら、入部するとも言ってないのに。」

「とりあえず、これから通しするんだ。はやく着替えて！」

……………これはやるっきゃなさそうだ。

でもま、ヘタクソにやって幻滅してもらえればいいか。

「ピ————試合形式の練習、はじめ————！」

〈見学〉（後書き）

信……俺、バスケ部はいりたかったな。

瞬……元々背え高いのに？

拓……馬鹿だなー瞬。背え高いからやるんだろ？

瞬……悪かったな、チビで。

〜熱中〜

笛が鳴る。

とりあえずさっさとやって道場に行きたいが、

早くかつ、ヘタクソにやらなければいけない。

例えばシュートをわざとインサイドキックで行うとか。

いくらなんでもキーパーはキーパーだし、ゴロシュートくらいとれるだろう。

しかし、人数が本当に少ない。

サッカーは11人でやるスポーツだが、合計8人しかいないではないか。

そこに俺らが入っても10人である。

相手はレギュラー………と言っても実力がまだマシなメンバーの塊。

拓也は2年なのに3年を従えてキャプテンをしている。

こっちは数少ない1年生と、雑魚あて。

5：5でやるサッカー部なんて、初めて見たよ。

「じゃ、先攻どうぞ！」

拓也が俺にボールをパスする。

俺がわざととりこぼすと、信一はそれをカバーしてくれた。

「信一！二人で速攻だ！パスパス！」

俺は、サイドを走る信一の後ろで、ゴールに向かって走る。

信一が的確なパスを出してくれた。やっぱり上手いな。信一。

ここで外したら信一に申し訳ないと思い、仕方なく、思いっきりシュートした。

と言っても、ど真ん中である。当然キープされた。

「どんまいどんまい！」

一年生が俺らに応援をかけてくれる。それはいいけど、お前らも動けよな…？

信一がこっちよってこると思ったら、突然めっちゃめっちゃ怖い顔をして、

「……ちゃんとやれよ…瞬。」

と言った。

「ごめんごめん。でも、だから言ったろ？俺めちゃへタクソだって。」

「……ちがう。お前すごい上手いのに、わざとテキトーにやってるだろ…。」

ギクリ

「…このサッカー部、みんなへタクソだけど、みんな一生懸命やってる。……お前、失礼だぞ…？」

「……分かった分かった。」

信一…怖えー（汗）

ここまで言われたら、本気でやるっきゃないか。

つか…このサッカー部ほんとへタクソ…。

並以下だな…言っちゃ悪いが。

俺が相手のボールをカットすると、そのまま連続フェイントをかけて、一気にゴールの方へ抜けた。

「いけー！シュートだー！」

「ただ俺はノーモーションで、ゴールとは逆の方向にボールを運んだ。」

「……キーパーがこちらに気を向きすぎて、逆の存在を完璧に忘れていた。」

「逆には、信一が走っていた。」

「信一はボールを貰うと同時にゴールに滑り込ませ、点を入れた。」

「ナイスっ！信一！」

「……やっぱり、上手いな……。」

「他のチームメンバーは啞然としていて、そのうち口々に」

「あんなシュート初めて見たよ。」

「……と言いつつ……お前らどれだけサッカーできないんだよ。」

「……すげーすげー！お前ら息ピッタリだな！」

「拓也が俺らの方に駆け寄ってきた。」

「あのさー拓也、俺、やっぱり入んのやめとくわ。」

「……俺も……。」

「…………えっ…？」

「俺、空手が趣味なんだわ。それに、今回は…………マグレっていうか…。」

「…………瞬が入らないなら…俺も入らない。」

「…………そっかあ。」

しーん

うわー、どーしょ、この空気。マジ。

めちゃくちゃ、きまずいんだけど…………

「いや、来てくれただけでもありがとうだよ。あんなプレー実際に見たの初めてだし。

うちの部員にも、いい薬になっただろうし。」

…………じーん。拓也、お前ってヤツは……………イヤつだな。

その時、練習場のフェンスが大きな音を立てて開いた。

「……………まだ廃部にする気ないの??？」

制服をキチッと着た集団の、気の強そうな女が冷たく言い放った。

〜熱中〜(後書き)

瞬…拓也は実際の所サッカーどれくらいうまいの？

拓…俺？……並。

信………。

生徒会長

「……………」

サッカー部員が一斉に黙る。

俺が拓也に

「誰だよあいつ。」

って耳打ちすると、拓也は

「この学校の生徒会長、「泉川遥」だ。」

アイツの女子の支持率が高いからな。へたに逆らえば、すぐに廃部にされる……………」

と言った。

へー。怖えーな。

「あらあら、あなたは……………転校生の山元 瞬くんじゃない?」

え…。何で俺の事知ってたよ。

「見た所スポーツは出来なさそうね。どう?生徒会に入らない?」

…カチン。

「んだとおおお!?」

「おい!やめる瞬。」

「なに?凶星だった??クスツ。」

何なんだコイツ。失礼過ぎるだろ。

「へっ、そつちこそ…んなにツツパってつと、いつまでたっても彼氏できねーぞ?」

「……!」

「……瞬。アイツが彼氏いないって…分かるのか?」

「俺の女に対する勘をなめんなヨ。」

「あたしにたてつく気…?…いいわ。あたしとカケをしない?」

「……カケ?」

「おい、瞬。こんなヤツの言う事聞くなよ。」

「……サッカー以外でもスポーツはできるの?」

「球技ならな。」

「フフフ……。実はバスケット部の大事な大会でレギュラーの一人がケガをしてね。」

「…何だよ。出るってか？」

「…まあ、そうね。」

それで、10点以上差をつけて勝てたら…サッカー部の存続を認めて上げるわ。」

「10点だと!？」

サッカー部員がざわつく。

「ただし、それが出来なかったらサッカー部は今後一切活動しない事!」

「瞬。やめろ!無茶だ!」

「いいぜ…?受けてやるぞ。」

グラウンドがざわつく。

「……………ま、口だけは達者なようだし、せいぜいがんばりなさい。試合は3日後よ?二言はないんだからね?」

「おい!瞬、お前バスケできんのか!？」

「人並みに…な。」

「……………」

「拓也…、俺を信じろよ？絶対アイツとの賭けに勝ってるよ。」

「……………瞬。」

「さあてと、道場行くな！」

「……………までよ……………瞬。」

信一が俺の後ろにくっついてきた。

「……………勝機なんてあんの？」

「んー？信一も俺の事信用してねーのか？」

「……………」

「俺、土壇場に強いからダイジョーブ！」

「じゃーな！信一。俺、こっちだから！」

「……………瞬。また明日な……………」

もうすっかり、陽が落ちていた。

（生徒会長）（後書き）

泉…なんであたしに彼氏がない事…分かんのかしら…。

瞬…すくなくてもそういうオーラが出てるし、誰の勘でも分かるだろ。

カーン！

拓…大丈夫か…？瞬…。

瞬………し…死ぬ…。

〜土壇場〜

約束の試合の日。

市総体の会場、奈良市営体育館に全中学のバスケット部が集まった。

いくら生徒会長の命令とはいえ、突然入ってきた転校生に

レギュラーの一角を盗られたベンチは、敵意むき出しで俺を睨みつけてくる。

「ま、とにかく余裕で勝てばいいんだろ？」

「ああ、絶対勝てよ！」

俺がタオルを拓也に放る。

試合開始のホイッスルが鳴る。

3年生のキャプテンからボールをいきなり受け、敵の的にされる。

しかし、小柄なその体型でフェイントをかけ、次々に抜いて行く。

「す…すげえ。」

拓也はおもわず身を乗り出し、生徒会長の遙もただ口をポカンと開けている。

「山元くん！パスだ！！」

バスケ部一背の高いという先輩から合図を受け、瞬は敵を引きつけながらパスを送る。

先輩はそのままゴールを横切って……………シュート！

……………レイアップが決まった！

「おお！！！！すごいじゃん！すごいじゃん！！」

拓也がタオルを振り回す。

「……………でも…まだ一点差よ。無理に決まってるわ。」

遙がフンツとそっぱを向く。

「やるじゃないか！山元くん！！」

キャプテンとレイアップを決めた先輩に同時にほめられ、ますますベンチの視線が気になるようになる。

ピーー！

ジュン！

「っよっしゃー！！」

拓也がおもわずガッツポーズをする。

「この調子で余裕勝ちするぞ！」

キャプテンが士気を上げる。

「オオオオ！！！！」

く土壇場く（後書き）

瞬……のろい……のろ過ぎる。このパス回し。

拓……それはきつと……『呪い』がかかっているからだ！

瞬…………。ヘックション！

〜完勝〜

ピー！」「試合終了！」「

あっという間に時間が過ぎた。

結果は10点差なんてモンじゃない。

36 - 0。完勝である。

40分間とはいえ、約1・5分に1ポイント以上入れている計算だ。

そのほとんどは、瞬のサポート、パスパット、ドリブルカットによるものだった。

「いや〜すごいね！山元くん！どう？この際もう入部しちゃわない？」

キャプテンに肩をつかまれる瞬。

ベンチだけでなくレギュラーの一部までもが瞬を睨む。

「いや…遠慮しときます。俺、空手以外のスポーツにそんなに興味ないんで。」

「そっかあ。残念だな。ま、ありがとよ！」

背の高い先輩に頭をなでなでされる。……なんかムカツクんですけ
ど。

「！そうだ、彼氏のいない生徒会長は……っど！」

「瞬！ありがとよ！……てかすげーなお前！！」

拓也が遥より先に瞬に突っかかる。

「……おう。ま、マグレだけどな。」

「またまたあ！謙遜しやがって！コイツう！」

拓也が瞬の頭をコンコン叩く。

「……………」

「……！」

「……私を完璧に怒らせたわね？覚えときなさいよ？」

遥が静かに冷たく言い放ち、去って行った。

「あーあ。何されるか分かんねーぞ？瞬。」

「……とりあえず覚悟はしとくか。」

瞬が流真道場に着くと、内山が待っていた。

まだ他はだれも来ていなかった。

「……………山元お…！てめえは3度までも俺を怒らせちまった…。覚悟しろよ？」

「……………？二度目までは自覚あるけど、三度目は知らねーぞ？俺。」

「……………、お前、生徒会長と気安く喋りやがって！！！！」

内山が瞬めがけて上段回し蹴りを入れてくる。瞬は軽々しやがんでかわす。

「……………へ。デカヤマお前、まさか……………」

「……………！！」

下段払い。飛んでかわす。

「へー！！お前あんなツンツンが好きなんだあ！！」

「……………だっ……………黙れイ！」

上段刻み突き。流し受け。

「何？ツンデレが好きなタイプ？」

「……………クロス！」

連打。連打かわし。

「やっぱ…甘え！」

瞬、もぐつての足払い。

ドツテエェン！！

「ふう…これで三度目の尻餅だな。」

「……………畜生が。」

「好きなら告ればいいじゃん。」

内山が立ち上がって瞬を指差す。

「……………山元！お前に決闘を申し込む！！！」

「……………はあ？」

「明日の放課後…学校の裏の広場でだ！」

「……………おいおい。空手と決闘をゴツチャにしてねーか？お前。」

「だれが空手と言った？ケンカで勝負しろ！」

「……………。俺、ケンカは苦手なんだよね。」

瞬が頭をポリポリかく。

「べつに空手を使っても構わねーぞ？破門になりてえならな。」

「……………。」

(注) 日常で空手をつかってはいけないのが基本である。

「じゃ、いいよ。俺の負けで。不戦敗。」

「…ま、来ようが逃げようがどうでもいいがな。俺は。」

「……………いいのかよ？」

「明日になりゃ、お前は絶対来る気になるぞ。」

「？」

「じゃーな。」

内山は荷物を持って道場を出ようとした。

「…おい！デカヤマ！」

「なんだよ。」

ガラツツツツ！

道場の門が勢い良く開く。

目の前に優牙が立っている。

「……………これから練習始まんぞ？」

瞬が小声で言う。

「…？どうした内山。忘れ物でもしたか？」

優牙がキョトンとした顔で言う。

「……………いえ。何もありません……………」

く完勝く（後書き）

内：ツンデレってなんだよ。

瞬：知らねーのか？ツ……………！！

拓：どーした？

瞬（あぶねー、これ答えたら俺がオタクみたいに思われんじゃん）

内……………。

〜決闘（前編）〜

次の日ー。

瞬が学校に行くと、他の生徒からジロジロ見られているように感じた。

（…なんだ？生徒会長の仕業か？）

そのとき後ろからポン！と肩を叩かれた。

「よっ！瞬。」

「ああ、拓也。おはよう。」

「？…どうかしたのか？」

「いや…、別に…。」

校内に入ると、二人とも目が点になった。

校舎中あちこちにポスターのようなものが貼ってある。

「転校生『山元』が、番長『内山』に挑む!？」

「……………」

「……………なんだこれ…瞬。」

「……………俺が聞いてえよ。」

（……………アイツが言ってた『明日になりゃ分かる』って…コレかよ…）

「…これ……………マジ？」

「……………んまあ…成り行きで…よう。」

「お前内山の怖さ知らねーだろ？
アイツこころ辺の不良をシメてるヤンキー集団の幹部だぜ？」

ふーん。アイツが、幹部？

そのヤンキー集団は、一体どれだけ弱いやら。

「ま、大丈夫だろ。で？拓也は見に来るのかよ。」

「サッカー部の英雄の姿を見に行かないわけないだろ？」

「英雄で……………」

「それともなんだ。負けるトコを見られたくねーのか？」

「は？……………じゃーいいよ！見に来いよ！俺が・勝・つ・所を…！」

「おう！言ったな？サッカー部全員で見に行かせてもらっよ。」

「あっという間に放課後。」

「ギャラリイ多い！！！」

なんかウワサの不良幹部もいっぱい来てるし、生徒会もすっかり来てる。

全校生徒の3/4以上来てるし、しまいにゃ校舎から望遠鏡使ってみてる先生までいるし。

「あーあ。これは…終わったな。」

俺の陰気で地味な夢の生活は幕を閉じた。もう当分幕は開かないだろうな。

かといって…男として、武道家として、

決闘に生半可な気持ちで望むというのはルール違反だよなあ。

……………うっ！

「いーじゃねーか！武道家のルールなんて守らなくても、負けとけ

負けとけ！」

「そんなことしたら、内山君に失礼だよ！」

瞬の中で天使と悪魔が会話する。

「どーかな。好きな人の前で勝てたら、嬉しいと思うぜ？」

「最初はそうでも、あとから絶対に怒れてくるよ！！！」

「うるせーなあ。テーマは黙っとけ黙っとけ。」

「黙らない！瞬！本気で戦おう！負けるのは悔しいでしょ？」

「それより、後々不良とかに目つけられるの方がイヤだぜ？」

「それに拓也とも約束したじゃないか。絶対勝つって！」

「へっ！何青春じみたこと言ってるんだよ。」

「うるさいっ！少し黙っというて！！！」

バキッ！

「ぐはっ！」

天使……WIN！！

よし。本気で戦おう。内山にも失礼だな。

「よう！逃げずに来たか！山元！」

内山が指をポキポキならす。

「……………。お前にゃあ悪いが、本気でやらせてもらっせ。」

「あつたりめえだ。本気ださなかつたらボコボコにすんぞ。」

「お前には無理だろ。」

「…前の俺と思わない方がいいぜ？」

ひゅー…と風が空間を斬る音がする。

次の瞬間。内山はこっちに走ってきた。

「ハッ！」

内山がフックをしかける。

瞬はホームベースの滑り込みのように内山の足下に滑り込む。

「うわっ！」

ドテテエー!!

「おお！内山がこけたとこなんか初めて見たぞ！」

「やるもんだな。あの転校生。」

ギャラリーがザワザワさわぐ。

「……っくー！」

「ワンパターンでここまで転ぶヤツ、初めて見たぜ。」

「……うおおおおー！」

またしても向かってくる。

ワンパターンでかわそうとすると内山はわきばらにパンチを入れた。
きた。

「……っつうー！」

「……本気で来ないと、怪我するぜ？」

「……分かったよ。探り合いはもう十分だな。」

く決闘（前編）く（後書き）

拓：はいはい！内山か山元、どっちに賭けるう？

瞬：……………何やってんだよ、拓。

拓：え？……………『お約束』？

〜決闘（後編）〜

「うらあ！！！！」

内山が回し蹴りを仕掛ける。

「俺相手にそう何回も…片足立ちしてんじゃねえ！！！！！」

おなじみ足払い。

またまたこける内山。

「くそつたれー！てめーも打ってこいやあ！」

「悪い。一発で決めさせてくれ。」

「何い！？」

内山が突っ込んでくる。

瞬は内山に背を向けてしゃがみ込む。

「……………反動……………」

そこから左足のかかとで内山の顎をクラッシュ！

「かかと顎撃^{アッパー}！」

内山は舌を嚙んだようで吐血。

「ふー。」

「……ぐ……ふ……。」

「終わりイ！」

「ワーーーー！！！！！」

「ホントにあの内山を倒したぜ！？アイツ。」

「アイツ迷惑だったんだよなあ。色々。」

「スカッとしたぜ！転校生！ヒューヒュー！！！」

「……………」

生徒会長、遥はただ黙って瞬を見つめていた。

「お疲れー！瞬。まさかホントにやっちまうとはな！」

拓也が瞬に駆け寄る。その後ろに信一もいた。

「あれ、来てたんだ。」

「……………うん。」

「さてと、おーい！お前らぁ！！コイツ病院に連れてってやれよ？」
瞬が不良グループに声をかける。

「……………！！！」

「なんだよ、病院連れてくなら瞬が連れてけば良いじゃん。」

拓也が言う。

「決闘を申しこんだコイツが敗者になって、
その上勝者に病院に連れられた…じゃ、いくらなんでもかわいそ
うだろ。」

(それに生徒会長(好きな人)の前だしな)

「さて！拓也、信一！帰ろーぜ！」

次の日。瞬は学校に行きたくなかった。

() きまずいなあ。絶対。今思ったら…なんでしちゃったんだろ…
…)

「いつてきます…。」

瞬が外に出ると、正面の家から遥が出てきた。

「いつてくるねー!」

「…え?」

「…!」

「よ…よう生徒会長さん。あんたココだったんだな…。家…。」

「……………」

() ヤッベエ。一刻も早くここを去りてえ!…!気まず過ぎる!…)

「……………」

「じゃ…じゃあ俺、急ぐから。」

そう言って瞬が走り出そうとした!。その時だった。

「待って!」

「……>?」

「……付き合ってください……!」

く決闘（後編）く（後書き）

拓　：おーっと！？！ここでまさかの王道ラブコメパターン進出か
あ！？

信　：……………。

瞬　：……………。

遥　：……………。

遥以外：ええ！？

く告白く

「なっ……………ななな？」

突然のことに思わずあとずさりしてしまう瞬。

何…。コレってもしかして…告白！？

うわ、告白とか……………されたの初めてだよ（汗）

っーか、ちょっと待て。

つい最近まで俺の事をまるで家の中に時々出没する黒き魔王Gの如く嫌っていたというのに、なんだこの手のひら返しは。

おどおどしながらも、外見だけは平常をなんとか保とうと必死になる。

「……………、実は…あなたが転校してきた日……………。」

遥は川沿いの手すりに前向きに寄りかかった。

く遥 回想く

一時間目の前の休み時間。理科室への教室移動の途中でだった。

(……………今日転校生来るみたいだなあ。どんな人だろ。)

私はそう思って廊下を歩いてた。でも途中でハツとした。

「！いけない！職員室行かなきゃ！生徒会の資料もらうんだった！」

職員室に入ったら、すぐに一時間目始まりのチャイムがなっちゃった。

私は資料を貰って、職員室を出て理科室へ急いだ。

その途中であなたにであつた。

(…！誰…？見た事ないわ。！もしかして例の転校生!?)

初日から余裕で授業をサボってるあなたを見て、思わず興味が湧いた。

コソコソ隠れながらあなたの後をつけた……。

教室の角に隠れてたら、突然内山くんたちが入ってきて……。

すぐに先生を呼びに行こうと思ったけど、怖くて身体が動かなかったの。

そのとき、あなたはアツという間に内山をやっつけたんだもん。

思わずスカツとしちゃって…。

それで、ますます興味が湧いて、放課後、サッカー部に行ったの。

金城くんが大つきな声で「仮入部、絶対来いよ！」なんて

叫んでるから、行き先はすぐに分かったわ。

影からコソッと見てたら、他の部員と比べ物にならないくらい上手いんですもの。

それで、試してみたくなったの。あなたの運と運動神経の良さを。

まあ、そのときに彼氏がない事を見抜かれた悔しさもあったけどね。

私も、まさか本当に10点以上入れれる何て思ってなかったわ。

普通に活躍してたら十分だったのよ。

それなのに10点どころか、もっとすごい差をつけてきたから、な

んかもつと悔しくなってるね。

同時に胸がドキドキして…。

それで昨日の決闘。二回も内山くんも倒しちゃったもん。

私、内山くんみたいな人の嫌がることする不良、嫌いだったんだあ。

もう我慢できないくらい恋しくなって…。

~~~~~

遙がそこで顔を真っ赤にして口ごもる。

「……………」

「……………。お前生徒会長のクセにサボリ癖あんのか。」

「なっ…失礼ね！その時だけよ？」

「そっ…そっか？」

「そ…そっよー！」

「……………」

どうしよう。この展開。

内山……………ハートブレイクだな。完璧に。

可哀想だ。俺が言ってあげられる事ではないけど…。

……………。

「…とりあえず…。返事はまた今度でいいか？」

「うん…。待ってるから……………」

俺は軽く泉川に手を振って学校へと向かった。

く告白く(後書き)

信………俺らの

内…出番はア!!!!!!

拓…どうなってんだあ!

く相談く

「いいじゃねーか、もう。付き合っちまえよ。」

拓也が細い目で瞬を見つめる。

学校に着いてからはもう大変だった。

内山がりベンジだと言わんばかりに襲ってきたので

まず一本。

学校に入ってから、女子にはコソコソなんか喋られてるし、

急に他の部活からの勧誘が来たり、

全く初対面の人から「よっ！今日暇？」とか言って肩に手をやってきたり。

…で、休み時間。

女子はもちろん、男子にさえ横目で見られている。

瞬は今朝の事を拓也と信一に話した。

「……………賛成。」

信一も拓也に同意する。

「でもよう、内山にさらに恨み買っつ、やなんだよなあ。」

「いいじゃねーか、全校生徒の約半分を敵に回すより。お前強いんだし。」

「……………そうそう。」

「……………でもなー。何かパツとしねーっか。」

「そうか？生徒会長、そこそこ顔良いと思っぜ？ま、俺ならイヤだけど。」

「顔じゃねーよ、バカ。」

「……………。」

キーンコーンカーンコーン

「あ、次、なんだっけ。」

「体育だよ、サッカー。今度はサボんなよ？二人とも。」

「……………」

「……………」

―運動場。

どつちやら剛堂ティーチャーは体育の教師らしい。そのまんまである。

「とりあえず、軽くウォームアップしたら、コーンドリブル2周！」

「……………イヤだなあ。」

「……………うん。」

「何が？」

拓也が瞬と信一の頭をポンポンと叩く。

「じゃ、まず最初は…この前の授業に出てない高須と山元！」

剛堂ティーチャーの一言で、全員がザワつく。

「じゃ、信一から行けよ。」

「……………分かった。」

シュツ！タツ、タツ、タツ、タツ、タツ、タツ、タツ、タツ、タツ、……………

「……………35秒！」

「すげーな。信一。俺と同じタイムだぜ？」

「……………拓はトップタイムなの？」

「ああ、だからお前もトップだ。」

拓也が信一の背中を叩く。

「じゃ！次、山元！」

「……………。」

シュツ！タ……………タタツ！……………コロコロ……………。

「……………。」

タッタ……………ババツ、トン！

「……1分13秒。」

全員再びザワつく。

「……なんだ、アレ。」

「俺よりへたくそじゃん。」

「アイツ喧嘩だけなんだなあ。」

「瞬。なんで本気でやらなかった？」

拓也が瞬のデコに人差し指を突き立てる。

「本気でやったら、また他のヤツらに目つけられる。」

「………なんだソレ？」

女子は体育館でバスケットをしていたが、休憩中にそのほとんどが瞬を見ていた。

く相談く（後書き）

拓：よっ！流石主人公。モテるね！。

瞬：作者のエコひいきだろ。

〜決意〜

体育のあと、俺は自慢じゃないが3人に告られた。

なんだよ、皆なんでこんなチビ眼鏡をかつこいと思つもの？

俺が女なら絶対無理だね、うん。

100歩譲ってアン　ールズだよ。チビ眼鏡とか論外、論外。

まあモテて悪い気はしないけどね。

みんなには悪いけど断った。まだ生徒会長との話もついてねーし。

「よつ、モテ男。今日もサッカー部こねーか？」

拓也が後ろから肩に手をかけてきた。

「それなんだよなあ…。俺、できれば部活で空手をやりてえんだよなあ。」

「道場でやりゃあいいじゃん。師範がイトコなんだから？」

「まあ指導はそっちでやるとしてさ…。道場だと交流戦に参加できねーんだよな。」

「……ほづ。なるほど。……うーん。なんか良い手は……。」

「……うー……ねーもんだなあ……。」

「………一つあるよ。」

信一が間を割って登場。

「うわっ！……びっくりしたあ信一。急に出てくんなよ。」

拓也は本気でビビっている。拓也もしかしてオバケとか無理系？

「それより、信一。その方法ってなんだよ？」

「………瞬に一番最初に告白した人。」

全員一瞬黙る。

「………あっ！なるほど。生徒会長に新しい部活の承認してもらおうケか。」

拓也がうんうん、それがいい。とうなずく。

「……でもよお、俺まだ返事出してねーんだぜ？」

「だーかーらー、もう付き合っちまえば良いじゃん！」

「………うーん。」

「………付き合ってみないと分からない事もあるよ。」

「……うー！分かったよ！そうします！」

「別に無理しなくてもいいけどよ。」

拓也が急に引く。

「……なんだよその急に引く態度。」

「……だって生徒会長も一応女でしょ……？」

……いいかげんに付き合つのは可哀想かな……と。」

「……たしかに。」

おもわずうなづく俺。

「分かった。とりあえず、付き合ってみるよ。」

〜決意〜（後書き）

瞬…なあ、この小説主旨変わってね？

バトル展開が多いって言うから配役引き受けたんだけど。

拓…作者が男ばかりだと読者も引くだろう、ってさ。

く高望みく

「ほ…本当に良いのね??」

生徒会長は顔を真っ赤にしてうつむいている。

付き合おうと決めた次の日の朝、偶然にも再び家の前で鉢合わせしたので

俺は照れくさいながらも自分の答えを告げた。

「わ…私…山元くんモテるから…いっぱい告白とかされてたし…。  
絶対フラれると思ってたの…。」

生徒会長は口の当たりに手をやって、動揺を隠そうと必死だ。

………確かに…かわいいかもしれない…。

別にツンデレ…が的なワケじゃないけど…っていつかそう言う事全く関係なしに

内山がコイツを好きなのも分かる気がする。

だって良く見たら顔は並以上だし、胸…もそこそこあるし…。

俺、大丈夫かな……。

チビ眼鏡がこんな高望みして、人生もう終わるんじゃないか？

今がもしかしたらファイバータイムなのかもな……。

どうせ寿命が短くなってるなら、一通りイベントが終わってから逝きてえな。

デノート（映画版）みたく「眠るように」ね。

「あ……ありがとう。こんな私を選んでくれて……。」

少しずつ、俺らは学校に向かって歩き出した。

「その……代わりについてワケじゃねーよ??お前の権限で頼みたい事があるんだけどさ……。」

言いくらい……。実に言いくらい。

どう考えても、この経緯で話す事じゃないのは分かってる。

でも俺の空手に対する欲が収まらない。

「新しい、部活の承認をして欲しいんだけど……。」

途端に生徒会長の顔が暗くなる。

「ごめんなさい……。私ができるのは学校側への「部活の申請」だけなの……。」

「あ……それだけでも全然いいから！！試して欲しいんだ！！」

慌ててフォローを入れる。

生徒会長には出来る限り笑っていて欲しい。

「でも、新しい部活って……？あ……まさか……。」

「そう、空手部。」

「そうね……噂じゃ空手も凄いらしいものね。」

「ま……まあ所詮噂は噂だけど……ね。」

「申請はするけど、人数は？最低でも10人はいないと申請できないわよ？」

ガーン！そ……そうだったのか……。

「その顔は……人材については考えていなかったようね。」

「あ……あ。ま……全く考慮してなかったぜ……。」

「一時は3、4人で申請できるってときもあったんだけど、  
そつだとくだらない部活ばっか増えるって言って、10人。  
ま、極端っちゃあ極端よね。」

「お……俺、頑張って人探してみるよ。」

それで……人が集まったら……申請……してくれるか？」

おそるおそる顔をあげて生徒会長を見てみる。

「もちろん。100%先生に通して上げるわよ？」

生徒会長がニツコリと微笑む。あ……ヤバ。なんかめっちゃかわ  
いいんですけど。

朝っぱらから生徒会がある上、人気者の俺と並んで登校すると目立  
つ、と言って

生徒会長は一足先に学校へ向かった。

俺は結局、一人で学校へ向かうことになった。

そしてその途中、ある不良グループに捕まった。

「……なんですか。俺、早く学校に行かなきゃいけないんですけど。」

「……あれえ？古川さん。もしかして間違えちゃったんじゃないですか？」

不良の一人が中央の別格の奴に話しかける。

あの中央の奴……。あいつはただモンじゃない。

いままで戦った「不良」という定義にはとても収まらない器だ。

「いや……合っているよ。人を見かけで判断しちゃいけないって。」

軽々しい。でも、コイツは間違いなく、『何か』をやってる。

「ここに来たのは他でもない……。話があるんだ……。」

「……そうですか、手短かにお願いします。」

「てんめえ、天下の古川さんに向かってなんて口の聞き方を……！」

「ああ、ちょっと、黙ってて。」

中央の奴が俺に近づいてくる。

「……………何ですか？」

「率直に言つと……………俺らのグループに入らない？…っつてことさ。」

く高望みく（後書き）

遥…じゃ！先に行くわね！！

瞬…お…おう！気をつけ…

ポテ！（遥、つまづいてこける）

遥…い…痛ったあ…。

瞬…（こ…これはツボだ…！！）

く勧誘く

「グループに……入れ??」

「ま、グループつつつてもホラ、分かるよな?」

「……………」

どうやらこいつらは俺の力を必要としているらしい。

まあ、俺は不良に興味は無いしね。

「立ち話もなんだし、場所を変えようか。」

「悪いですけど、俺、これから学校ですし……。」

「ああん?てめえいい加減にしろよ?古川さんは……。」

「黙れ。」

「……………ッ!??」

「……………ってさっき言ったよね?」

中央の、古川ってヤツがニコリと仲間に微笑む。

あいつが頭…ってことか。

「ああ、言つとくけど、僕は頭じゃないよ？あくまで幹部。」

げ。見抜かれてたよ、考えが。

「ま、用事があるなら仕方ない。また放課後。」

「え…良いんですかイ？こいつ、逃げるかもしれませんか？」

「ふふ…大丈夫。僕には考えがあるから。」

「しかし…。」

「うるさいな。消すぞ。」

「……ッ!？」

「……ってのは冗談だけど。じゃ！山元くん。また後でね。」

そういうと、古川は手を振って去って行った。

…何だアレ。

ハッ！ヤバい！遅刻する!!!

く古川く

「ふう、学校終わりっ！！」

首を左右に振ってコキコキ鳴らすと、なんか気持ちいいんだよなあ。

「……………で？部員はどうするんだよ？」

突然拓也が顔を近づけてくる。

近いよ、オイ。

「どづ…って。まだ考えてないけど。」

「……………道場で、籠ココ子に通ってる奴を探してみれば？……………」

再びニユルリと登場、信一。

お前、それ趣味？

でもまあ、考え自体はなかなか良い。

あんだけ人いたら、少なくとも一人はいてるだろう。

「じゃ、今日、帰りに行ってみるよ。」

そういうと、俺は信一と拓也を置いて早々に道場へ向かった。

道場に着くと……………なんかいるんですけど。

なんか、張ってるんですけど…ヤンキーが。

しかもめっちゃいるし、イカツいし。

門下生がめちゃくちゃ入りにくそうな感じ……………って良く見たら  
ヤンキー集団の中にデカヤマいるじゃん…!

お前、なにやってんだよ……………。

「お…来たぞ…。」

「アレが内山さんを倒したっつ…。」

「バカ…お前声でけえよ。本人に聞こえたらどうするつもりだ。」

「…にしても、とても喧嘩強そうには見えねーな…。」

ボソボソと囁く声が聞こえる。

デカヤマは俺を見つけると、ズシズシとこちらに迫ってきた。

「古川をそそのかすとは…お前…何が目的だ。」

デカヤマがいつになく真剣な（多分本人はいつもそうだと思っけど）目つきで俺を睨む。

「…こ…古川？」

「…ハア…。古川に手を出して…生きて帰れるかな…。」

「…ど…どついう意味だよ。」

デカヤマは俺の質問を無視して、携帯を取り出した。

「…あ…あーあー、もしもし。内山だ、見つけた。

…ああ、やっぱりお前の言った通りだった。

捕まえとくから、早く来い。」

そういつと、デカヤマは携帯を閉じた。

「今の電話の相手は？」

「古川だ。ここに居てる。俺はもう帰る。」

「ええ！？いいんですか！？内山さん！」

「そうですねよ…コイツが逃げたりしたら、俺らが古川さんに…。」

「古川に…何だよ？」

デカヤマがヤンキー達にその先の言葉を言わせんとばかりの視圧を浴びせる。

「………一つ言っとく。俺は腐っても……”稔・zinn”の幹部だ。」

……腐っちゃ駄目だろ………。

そう言うと、デカヤマはヤンキー達を連れてどこかへ行ってしまうた。

門下生はそそくさと道場に入っ行って行く。

俺は古川って奴を待つ事にした。

まあ大体目星はついてるが………。

「お…いたいた。山元くん。」

……やっぱし。

古川って野郎は、予想通り、朝に俺に声をかけてきた不良だった。

「あれ？内山は？」

「……帰りましたけど…。」

「……うち。まあ……いいか。」

古川が髪の毛を掻く。

「俺は「古川こがわ 龍魅たつみ」。」

「俺は「山元 瞬」です。」

「あーあー、知ってるから。…で、考えてくれた？グループに入る事。」

「はい。で、一つ、聞きたい事があるんですが…。」

「？何さ？」

「……何で……俺を、誘うんですか？」

古川は難しそうな顔をしている。

目を泳がせてはいるものの、その視線はさっきのデカヤマと同じ、真剣な眼だ。

そして不意に口を開いた。

「喧嘩してーから。」

く古川く（後書き）

瞬：いまさらなんだが、この場所って関西地区なんだよな？

拓：？当たり前じゃねーか。

瞬：なのに、なんで俺ら普通に標準語（東京弁）で喋ってたんだ？

拓：……………なんでやねん！

瞬：は！？

く見返りく

「喧嘩したい……?」

とっさに俺は身構えてしまった。

古川が嫌なそぶりを見せたわけではないが、その言葉に、

その単純な一言に、やたら殺気を感じたのだ。

「あ、別に悪意はねーから。なんか俺、『覇気』?、使えるっぽいんだよね。」

だから結構、何でもなくても相手を威圧しちゃうみたいなんだよ。」

『覇気』て……。ワンスじゃねーんだから。

しかもそれだと『霸王色』じゃん。ルイじゃん、ルイ。

「まあそれはいいや。本題に入らなきゃね。……」「稔・Zinn」  
「つてのは知ってる??」

「いえ…、聞いた事はありませんが…。」

「稔・zin・ってのは…まあ、ここら一带で活動してる俺らのグループだ。」

「……はあ。」

「隣のNote ナイトメモ MEAつつうグループと、長い事対立してる。」

「……。」

……読み方。無理矢理読ませ過ぎだろ。

「…で、最近Note MEAにエライ強い奴が入ったって噂だ。

…まあそれでもウチが負けるわけは無いんだが…、「念には念を」ってヤツだ。」

「…色々説明していただいて申し訳ないんですけども、

俺、助っ人とかでもやる気ないですから。」

「ハハッ！言うと思ったよ。…しかし、やはり面白い……。」

「……??？」

「断るなら…断るなりに、ある程度「見返り」を受けてもらおうか。」

「見返り」???

「君はあくまで「不良グループ」に目を付けられた立場だ。文句を言う権利は無い。」

「……そりゃそつでしようね。」

所詮、社会のゴミって言われてる連中だもんな。

「……で、まあ色々「見返り」にも種類はあるんだが……。」

「例えば?」

「んー。「リンチ」「引きずり回し」「恐喝」まあ……エトセトラだ。」

「どれもお断りします。」

「……まあそりゃそつだわな。」

「……この人、「まあ」口癖だな……。」

「俺もこういう行為にはどれも興味は無いし、かと言って、嫌いつてわけでもない。」

俺はそういう事に一切興味が無い、つつつた方が適當だな。」

「……………で、俺に対する「見返り」は？」

「…まあ、長つたらしいのも好きじゃねえし、簡単に言つ。俺と勝負してくれねえかな？」

……………これが最初の理解不能言動の正体か……………。

コイツ…強そうだし、不足なし…だな。

「いいですよ。俺も…貴方とやってみたいと思つてましたから。」

龍魅はヒュウツと口笛をならす。

途端に上機嫌になつたのが一目で分かる。

強さをひたすらに求める。

俺はコイツに勝てるんだろうか……………。

いや…勝ってやるう。所詮内山と同じレベルだ。  
デカヤマ

「それじゃ、やりますか……………」。

〜理由〜

「……………」

ジリツと靴底で地面を擦る音が響く。

「大丈夫。大丈夫だ。所詮内山と大して変わらないレベルのハズ…」

なのに…この不安感は何だ？

「…どうした？俺と同じような不良は、その自慢の拳でねじ伏せてきたんだろ？」

古川が俺を煽る。

「そつだ。」

俺は、気に入らない奴を、この手でねじ伏せてきた。

『気に入らない奴』を……………。

…じつは…。

…こいつは、俺の『気に入らない奴』か…??

拳が動かない。

いや、身体すら動けない。

一步も。呼吸さえもしているのか、分からない。

時間がまるで止まっているような感覚。

急に目の前が動いた。

気がつくと、俺は古川に吹っ飛ばされていた。

「…っ痛…。」

「…。つまんねえなあ。予想してたのと全然違う。」

「………な…!？」

「本気を見せろよ。内山吹っ飛ばしたときと同じヤツをよオ。」

―理由ができた。

俺は今、古川コイシに殴られた。

これで、俺には古川を殴る『理由』ができた。

もう迷わない。

旋風のような蹴りを古川に極める。

今までで極めた中で、一番上手く、力強く入った蹴りだった。

「……………気に入らねえ。」

「……………それぞれ。『気に入らねえ。』……か。いいねえ。ケホツ。」

「…!?!?」

「いやあ、今のはマズかった。流石の俺も、…痛てて…。今のは効いたぜえ?」

…どういうことだ。入ったハズだ。

今の威力なら吹っ飛ばせるくらいの勢いなのに、古川は少し後退しただけ。

そしてなにより………今は『殺せる蹴り』だった。

自分で一瞬、ヒヤリとしたほどだ。

それが…。

「ま、本気になってくれたのならいいや。俺も行くぜ？」

古川が体制を立て直す。

古川のパンチやキックは、内山よりヘタクソで、そこらの不良と変わりない。

ダイヤモンドの筋肉でも、持ってんのか？

…にしても身体はスッキリしてるし、ゴリマッチョ系じゃないことは確かだ。

俺はへたくソなパンチキック等をすべてかわし、

角に追い込まれた所で腹に目がけて中段突きを炸裂させた。

……何が起こった。

身体中に痛みが走る。

俺が古川に攻撃を入れたはずなのに……なんで俺が食らってる？  
……  
……  
……  
カウンター返しでもしたのか？アイツ……。

「大体分かった。お前……空手家だろう？？」

ケロツとした表情で、俺に向かって古川は呟いた。

〜理由〜（後書き）

瞬　：シリアスなシーンにつき、後書きコメディは少々控えさせていただきますね。

拓　：シリアスシーンが終わるまでは勘弁したって下さい！！

信　：……………これ、後書きコメディじゃないの？

瞬&拓：……………あ。

く敗北く

「だから……何だっただけですか……。」

苦しい。

腹部に激しく痛みが走る。

呆れたように古川が呟く。

「お前……『三大武術関係』知ってるのか？」

「……………!」

「……なんだ……知ってるっぽいな。」

「……それじゃ……お前は……。」

「そう、俺は『合気道家』だ。」

『三大武術関係』……。

それは日本の三つの武術の相互関係の事だ。

それぞれ『空手』『柔道』そして、『合気道』を指し、それぞれに優劣がある。

『空手』は『柔道』に強い。

『柔道』は相手に接近しなければ相手を投げる事はできない。

しかし『空手』は、遠距離攻撃を得意としている。

近づかれる前に相手をのしてしまえる『空手』の方が有利なのである。

しかし、『柔道』は『合気道』に強い。

『合気道』は剛術、すなわち、突きや蹴りといった、

相手を直接的に攻撃する技を逆手に取って、相手をねじ伏せる。

対する『柔道』は、床などに叩き付け、間接的に相手を攻撃する技を使う。

なので、『合気道』は、『柔道』に弱いのだ。

そして……『合気道』は『空手』に強い。

さっきも述べたように、『合気道』は剛術を逆手に取って攻撃する。

『空手』は剛術の代表格。最も相性の悪い武術なのだ。

『空手』の全ての攻撃を、いわゆるカウンターでねじ伏せられてしまっ。

俺は、『<sup>自分</sup>空手』と最も相性の悪い、『<sup>古川</sup>合気道』と対峙していたのだ。

「勝てない。」

俺はコイツに勝てない。

急に手が震え出す。

恐れているのか？俺が…。

「……………山…元…くん……………？」

ふいに聞こえた声の方を見ると、生徒会長（座）が立っている。

遥だけではない。

龍門学園で、顔見知りの奴ら全員が俺を見ていた。

「なん……で。」

く敗北く（後書き）

瞬 ・ 皆さん、『三大武術関係』ってのは、この小説での造語ですよ？

拓 ・ 本気にしねーで下さいね！

作者 ・ でも俺は、この関係、あながち間違ってるねえと思ってるけどね？。

瞬&拓 ・ ……作者ア！！！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9396k/>

---

～ 正拳伝 ～

2011年5月31日16時18分発行